

紹介

『あまべの民俗誌』

盆踊り口説集の紹介

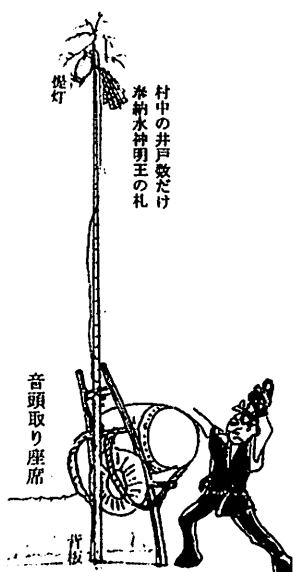
林 寅 喜

(佐伯市中の島)

はじめに

大衆娯楽に乏しかった幕末から、明治・大正にかけて農山漁村で盛んであったものと言えば、素人芝居に奉納官相撲それと盆踊りであった。

中でも盆踊りは旧暦八月十五日の夜、民家の庭一面



に射し込んだ月明かりのもと、櫓の上で声高らかに唄いあげる音頭取りの美声にあわせ、もろ肌脱いだ勇壮な太鼓打ちの撥擲きと、子ども達の囃子言葉に乗って、回りでは老若男女が輪になって踊り、それは終夜飽くことなく続いていった。一方、母屋の縁側には年寄りが詰めかけ、口説に耳を傾け聞き入っていた。

今ここに携帯用の小さな冊子がある。それは旧木立村の民謡民芸保存会が、昭和二十三年口伝を聞き書きして発行した口説本第一集を、昭和三十一年八月九人の保持者から改めて収録し、改訂して発行したものである。その内訳は音頭口説が十七編、念仏音頭・地藏和讃・田植え歌などの民謡が七編の二十四編である。なかでも音頭口説は、心中や情死のほか悲恋ものなどの作品が多く、何れも七・七と七・五の名調子で綴られているが、それらは事件の経緯を聴取した作者の発想によって、著述されたものと思われ、他に歴史の出来事を題材とした口説と合わせ収録されている。

以下掲載の内容を口説のみ簡略にまとめた『大意』を説明したい。

一、小五郎口説 四一章節

(一章節は三拍子(三行)以下同じ)

三重郷内山の炭焼き小五郎のもとに、京から公家の娘で玉代という姫が、神のお告げと称し押しかけ女房となつて入り込み、後に二人して財をなした(真名長者)という縁起物で、踊りの始めには必ず唄い上げていた。

二、おしよ亀井(亀松) 一六四章節

筑前遠賀町の資産家、坪衛太郎兵衛には実子の亀松と後妻の娘おしよの異母兄弟がいた。ところが、太郎兵衛が死亡した後後妻はおしよに家を継がせようと企て、亀松の殺害を企む。

これを知つたおしよは亀松に知らせ、二人して家を捨て笈摺を背負うて六十六部に身をやつし、諸国行脚の旅に出た。時に亀松十八歳おしよは十四歳であつた。

二人は四国から京大坂、紀州の高野山を経て東海道は三島宿でおしよが病に罹り、信濃の善光寺に辿り着いたがその地で死亡、亀松は小庵を建てて生涯を終え

たという物語。

三、おため半蔵 一三九章節

淵に身を投げ刃で果てる

心中情死は世に多けれど

鉄砲腹とは剛気な最後

ではじまる口説は、寛延二年(一七四九)六月十一日払暁、向柏江は流正院の娘おため(たみ)と、鶴山の医者元了の総領息子半蔵(丹蔵)が、悲恋の心中を遂げた実話をもとに唄いあげた、佐伯地方では最も良く知られた長音頭である。

中でも二人が辿つた死出の道行きを七・七と七・五調の名調子にまとめた場面は圧巻である。以下、これを紹介したい。

今宵十日の月代つきしろさえも (ソレ落としといつて

西の尾上に早傾きて 節回しが違ふ)

ソレ暗さも暗し後田の (後田うしろだ||字名)

ここを通れば思ひ出す

過ぎし五月の田植えには

村の娘子打ち連れ

苦の櫛の華やかに

管の子笠の一揃い

くけし真紅の紐締めて

緑の早苗抱え帯

誰を思いに瘦せ腰の

濡れて植えたる稲さえも

秋に実りて穂をかざし

末は世に出て儘となる

同じ月日の下に住む

妾とお前は何ゆえに

育ちもやらぬしいら穂の

実りもせいで果つるか

言えば半蔵がさて申すには

言うて帰らぬみな仇言よ

何を悔やみて鳴く時鳥

鳴いて飛び行く声聞きやおため

死出の山路や冥途の旅の

道を教えて先ずさきに立つ

(くけし||

くけ縫いの帯)

(儘||飯に通ずる)

(しいら穂||白穂)

(時鳥||ホトトギス)

この後二人は宇山城址に近い城の越に行き、夜明けを告げる寺々の鐘を聞いた後、心中したという物語。

四、志賀団七 一一七章節

寛永十四年(一六三七)奥州仙台藩家老、片倉小十郎の支配地、河崎街道坂戸村で、田の草取りをしていた百姓与茂作(古文書では与太郎)の妹娘が捨てた草が、通りかかった志賀団七の袴の裾に当たって怒りをかき、与茂作が子どものこと故と許しを乞うたが、聞き入れられず手討ちにされてしまう。

これがもとで臥せっていた母も死に、残された姉妹は親の仇を討つ決心をして身代を処分し江戸に出ると由井正雪の道場を尋ねた。

事情を聞いて感銘した正雪は姉を宮城野・妹を信夫と改名させ、姉には手裏剣、妹には鎖鎌を教えて武術の修行すること五年、正保二年(一六四五)目出度く仇討ちを成し遂げたという物語。



註 古文書によれば、正雪は姉妹が正面からまともに

立ち向かっても勝ち目がないと考え、前後左右から間合いを取って勝負が出来るよう、二人に違う剣法を教えたという。それは姉には鎖鎌と手裏剣、妹には薙刀であったと書いてある。

この後、慶安三年（一六五〇）に正雪が処刑された後、姉妹は法体ほつたいとなつてその菩提を弔つたという。

五、おすみ左衛門 四三章節

大阪の港町京屋の娘おすみは、見目麗しく花も盛り十八歳、これには御町の若い衆から恋文が雨あられと届けられたが、堅物のおすみは一向に目もくれなかつた。

ところが、一つ村を隔てた北向村の大黒屋の息子で、十九歳になる亀左がおすみを見染め、手練手管で口説き落とし、目出度く結ばれたという物語。

註 この口説は唯一他と節回しが違う、木立地区では扇子踊りとして保存されている。

六、天神記 九章節

太宰府天満の由緒書きである。

七、白滝 二三章節

横萩豊成卿の娘白滝を、摂津の山田村から小者として仕えていた次左衛門が見染め、和歌のやり取りによつて結ばれたという物語。

八、目連尊者 七章節

釈迦の弟子であつた目連尊者が、母の供養のため七月七日に盆を叩いて踊る供養を始めたという。盆踊り発祥の話である。

九、鶴姫口説 三四章節

薩摩藩主の娘であつた鶴姫に、小姓の力弥が見染め、隠れて恋文のやりとりをすること四・五回、ところが或る時、その文を乳母が拾つて藩主に届けたため、怒りに触れて乳母は手討ちに、力弥は切腹させら



れ、鶴姫はうつろ船に乗せて流され、三年三ヶ月後肥前松浦郷の平戸ヶ浦に打ち上げられた。

これを見て難を恐れた村人達は、在所の寺に相談したところ、事情を聞いた和尚は寺の傍らに小庵を建て、昼夜念仏を唱えて乳母と力弥の菩提を弔ったという。

十、主水白糸 七九章節

四ツ谷新宿の橋本屋で女郎であつた白糸の元に、鈴木主水という女房と二人の子持ち侍が通い詰めていた。見かねた女房のお安は、主水に意見したが聞き入れられず、詮方なく一家心中を図つたが果たせず、二人の子どもを連れて橋本屋に行き、白糸に会つて事情を話した。



しかし白糸は務めの身ゆえ客の内実は知らないが、その旨伝えると約束したのでお安は家に帰つた。ところが、居続けた主水は一向に帰つて来ない為、

お安は遺書と子どもを残して自害してしまう。この出来事を夢にも知らぬ主水は鼻歌交じりで家に帰り、死骸に驚いて檀那寺に行き戒名を貰つて夜中に葬り、遺書を携えて白糸に会い事の次第を告げた。これを聞いた白糸は心の呵責に耐えきれず、身の整理をして自殺してしまう。詮方なく家に帰つた主水は二人の子を残して後追い自殺したという。聞くも哀れな物語。

十一、小藤口説 二四章節

長州赤間が関で老舗の鶴屋に、小藤という気立ての優しい娘がいた。これに本町泉屋の総領息子梅治が想いを寄せ、三月住吉の桜狩りで小藤と出会い、意気投合して恋仲となり夫婦の約束をしてしまう。

ところが、梅治には両親の肝入りで同町の仕立屋の二番娘おはなと、夫婦にさせられてしまう。

その後、小藤と再会した梅治は、親同士で決めた結婚話であつたことを告げ、良心の呵責からお詫びしたいと言ひ残し、しんさい橋から身投げしたという悲恋の物語。

十二、庄一口説 三五章節

阿波の庄屋重郎兵衛は、見かけ倒して閑古鳥が泣く侘しさ、同じ在所の庄一が女房おせんは利発で気の利いた女であつた。これに重郎兵衛が想いを寄せたが俣にならず、庄一が大坂に上つた留守を狙つて口説いたが相手にされなかつた。

そこで、船子を集めて小早を仕立てて大坂に上り、兵庫の沖で庄一の船を見付けて乗り込み、有無も言わずに殺してしまふ。その後、船具や積荷など奪つて大坂に行き質入れして家に帰つた。

一方、不吉な夢見に悪い予感がしたおせんは、宮明神に参詣して祈願したら大凶の籤ばかり、そこで急ぎ大坂に上つて町中の質屋を訪ねて歩き、見覚えのある品々を買ひ戻して家に帰つた。

やがてこの事がお上の知るところとなり、重郎兵衛は呼び出されて吟味の結果、関係した質屋の類族共々、竹引きの刑に処せられた。

註 竹引きの刑は罪人を首まで土中に埋め、通行人に竹製の鋸で引かせるという刑罰

十三、牡丹長者 七二章節

奥州常陸の牡丹長者には、今若・吉野丸・三郎兵衛の三人の子がいて、上の二人には長男の嫁が朝日長者の一人娘、次男の嫁は夕日長者の一人娘で、三男の嫁は大内大納言の娘玉代の姫が訳合つて「うつろ船」に乗せられ、常陸の島の館に流されてその太夫に育てられたという、百合姫であつた。

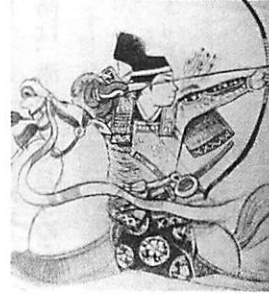
その百合姫は殊の外長者に可愛がられたため、上の二人はこれを妬んで衣装比べや琵琶三弦などと、難題を持ちかけたが相手に出来ずに負けてしまふ。

これを見て長者夫婦が言うのには、人を落とせば我が身が落ちる。人を落として我が身が良くなつたというためにはない。兄弟仲良く暮らすが一番目出度いと論じたという物語。

十四、那須与一 二二章節

那須与一(生別不詳・下野の土豪那須資高の子・名は宗高)は、小兵であつたが弓術に長じて十九歳の折り、讃岐屋島の合戦(元暦元年一一八四)において勝敗いまだ定まらぬ時、平家方より漕ぎ出された小舟の

軸先に立てた扇の的を『射よ』と命ぜられた与一は、黒川威しの鎧を着し兜を冠つて黒馬にまたがり、重藤の弓を持って海に乗り入れた。



その日屋島は波高く、小舟は揺れ動いて狙いが定まらない。そこで日頃念ずる那須明神に「射らせ給え」としばしの間祈願したところ、不思議と波は静まってきたので、見事射落とす事が出来たという。

註 弓 戦国時代には二、三メートル物が多く用いられた。従つて源平当時でも大差はなかったと考へる。

必殺力 三〇メートル以下

殺傷力 五〇メートル以下であつたとする。

以上から与一が扇の的を射たとする距離は凡そ六〇メートル前後ではなかつたかと考へる。

十五、川崎主水 二七章節

寛永十四年（一六三七）宇佐八幡の請芝居に大坂の歌舞伎役者と、その子どもと合わせ三十五人が行くことになり、主水もその中に加わつたが、両親は十九歳の厄年であることを心配した。しかし、主水は私が行かないと他の人に迷惑をかけると言つて参加した。

出立は船で賑々しく出港したが、途中伊豫灘沖で主水は病に罹り、豊前の長洲で危篤状態に陥つた。そこで龍哉という同僚に遺品の処分と後事を頼み、息子の駒若丸に親に恥じないような役者になれ、と言ひ残して息を引き取つたと言ふ。

註 十九歳にして子どもがいたとは少し早いように思ふ。四十二歳の厄年と聞き違へたのではないかと考へる。

十六、おうめ善次郎 三四章節

出雲大社の祭禮まつりで夫婦約束をしたおうめと善次郎であったが、おうめには親同士の約束で、兄八郎兵衛と夫婦にさせられてしまった。

ある年の田植え時みんなが田圃に出た後、一人で茶の仕度をしていたおうめの所に、茶桶を持って帰った善次郎は、おうめの情熱に引かされて昼間も忘れ、寝所に入り込み睦みあっていた。

そこへ帰ってきた八郎兵衛は、激高しておうめを斬殺返す刃で己の喉を突き、駆けつけた両親に後事を托し息を引き取った。

残された善次郎は菩提寺の脇に小庵を建て二人の供養をしたという物語。



十七、三太口説 六二章節

大和の国生まれの山崎三太は不幸な家で育ち、幼少の頃酒井屋という商家に、四十両で身売りされてた。そこでは馬の世話を任されて、京・大坂の間を駄

馬ばを曳きながら自慢の喉を聞かせていた。

或る時、伏見の町で鼓の稽古けいこしていた代官の娘が、この美声に酔い痴しれて、声も良ければさどかし器量もよからうと悩み続け、遂に病の床に就いてしまった。そうとも知らず両親は、医師や甫者うしや（易者のまちがいか？）と八方手を尽くしたが治癒ちゆせず、遺書を残して死んでしまう。痛く悲しんだ両親は盛大に野邊の送りをして新小松原という所へ葬った。

その後、たまたま家の前を通りかかった三太は、用人の市助に呼び止められ、代官の御用と聞いて同行し、姫の死因は三太の美声のせいと聞かされたが、合点がいかないと言って遺書を見せて貰い、訳を知って仏前に手を合わせた。

ところが、代官は仏前より墓参りが大事と言って市助をつけ、新小松原の墓地に行つて手を合わせた。三太は是非顔が見たいと言って経文を唱え、掘り返したところ、不思議な事に姫は蘇生し、目度度く結ばれたという。

しかし、三太には四十両の借金があると代官に告げると、不憫ふびんに思つて代官は金を出し、夫婦して大和に

帰って行った。

最も、姫はこの後四十九日目に死んでしまったが、残された三太は、楽な渡世とせいを送ることが出来たという物語。

あとがき

口説の内容を『大意』にまとめて驚いたのは、僅か九人の保持者で九三一章節、二八〇〇拍子(行数)にも及ぶ事項を暗記していたということである。これを纏める方も容易ではなかったと思うし、日数を要したであろうことも理解できる。今日では保持者がいなくて不可能としか考えられない。

なお、本書は前述の通り口説を聞き書きして纏めたため、正統とは言えないが地域によつて違いのあることも否めない事実である。また聞き書きのため、不可解な読みや意味不明な文字もあるが、これもやむをえない仕儀と考える。

何れにせよ、この冊子は『あまべの民俗誌』として、貴重な資料であることに変わりはない、と思う。

